

DOIS Interview

第2回

木戸大介ロベルトさん
外務省職員



木戸大介ロベルト（きど だいすけ ロベルト）

2004年 修士課程修了

1978年、日本人の父とエクアドル人の母の下、横浜に生まれる。2002年、東京大学法学部を卒業し、同大学新領域創成科学研究科国際協力学専攻修士課程に進学。

2004年、外務省に入省。同省では、日EU関係、文化外交、日米安保等に携る他、2012年からは宮内庁に出向し、侍従を務める。2014年8月からは、外務省経済局経済連携課に所属し、TPP交渉等を担当する。

①今のようなお仕事をされていますか

現在、外務省の経済局経済連携課に所属しています。中でも、先日国会で承認された日豪 EPA や現在交渉中の TPP を担当しています。日豪 EPA に関してはまさに国会の集中審議を経るということもありまして、かなり大変な業務でした。現在の仕事の前は宮内庁に出向してまして、2年間侍従として働いていました。侍従として働いている間は、両陛下の国内外の御訪問に合わせて出張にも行きましたね。昨年12月には両陛下がインドを御訪問されましたが、その際には事前の準備として7月、10月と2回インドを訪問しました。両陛下が訪問される12月のインドは比較的涼しい季節だったのですが、事前準備で行った時期は真夏の暑い時期で、常に岩盤浴をしているような汗が噴き出る滞在だったことが印象的でしたね。侍従の前は、外務省の北米局日米安全保障条約課にいて、在日米軍の再編について担当していました。当時はよくアメリカ・ワシントンに出張に行きましたが、その頃の出張は滞在日数が非常に短く、現地には泊もしないこともあってまさに弾丸でしたね。アメリカ側と交渉した内容を、その日のうちに外務省に伝えるための報告文書を作るという作業をしていました。

②なぜ国際協力の興味を持ったのですか

高校生のときに生物学が好きだったので、生物学者になるのかなとか、医者になるのかなと考えていた時期もありました。ですが、当時は環境保全・環境保護が国際的な最大の課題となっていた時期で、どうかしないといけないという意識が強まっていた時期でした。僕自身、母方の母国でもあるエクアドルに5年間暮らしていたこともあり、環境問題には大いに関心がありました。また、僕の職業観として「好きなことより、自分が貢献できることをしたい」と考えていて、異文化へ適応力やスペイン語が話せるという自分のアドバンテージを生かして国際的な環境問題に貢献できる仕事に就きたいと思い始めました。そこで、「国際公務員になるぞ！」と目標を立て、目標達成のための3つのステップを考えました。まず、世界を相手にやり合うためには「法律」の知識をもつこと、またコミュニケーションのために「英語」の知識を持つこと、さらに専門性として「環境」の知識をもつことが必要だと考えました。その中でも、最初につまらなそうなものからやろうと決めて(笑)、学部で法律を勉強して、大学院で環境を勉強した後、英語圏に留学しようと志しまし

た。そこで法学部を卒業した後に、新領域に入ったんです。ところで、よく海外で環境問題を解決したいと話すときに「なんで海外なんだ？」と訊かれることもあるのですが、僕の理解では国内の環境問題はほぼ手当されており、それよりも日本が影響を及ぼす途上国にこそ環境問題が存在していると考えていました。ですから、世界銀行や UNEP、UNDP(※注1)といった国際機関に入ってこうした問題を解決したいと考えていましたね。今の DOIS の学生にもそのように思っている人はそれなりにいるのではないのでしょうか。

③専攻に入って得られたことを教えてください

専攻の中で得られた一番の視点は何かというと、それを言うと元も子もないけれど、現場に行っても何もわからないなということですね。僕が新領域に入った理由の一つに、実際に現場に行くフィールドワークへの憧れがあり、現場重視の石弘之先生のゼミに入りました。石先生が退官されてからは佐藤仁先生のゼミに移りましたが、フィールドワークを重視する視点は共通していて、地の利が利くエクアドルの森林をテーマにして念願のフィールドワークを行いました。けれども、1 回目に行った時は 1 か月くらい色々行いましたが、後から思えば、結局何を見に行ったかもよくわからないまま帰ってきました。やはりよく勉強していかないといけないなと思いました。事前の準備はすごく大事で、「準備と練習」とよく自分では言っているのですが、準備不足で行くと結局現場では森の中をただ歩いているだけで何もわからないんですよ。それを一番学んだかなと思います。



ちなみになぜ森林研究かということ、元々タイをフィールドにして森林の研究をされている佐藤先生の下で学ぶのであれば森林だろうと思ったからです。というのも、「好きなことより、貢献できること」という僕の職業観に加えて、自分の行動に際して常に判断基準として使うものの中に、「その場や与えられた状況を最大化する」という方針があります。具体例でいうと、例えば外務省入ってフランスに留学をしたときは、2 年間日本料理は食わず、基本的にフランスの料理に徹することにしていましたし、体育の選択種目ではフランスでしかできなさそうなものをもってフェンシングを選んだりしました。

④専攻在学中の課外活動や留学経験などがあれば教えてください

僕は当時全国青年環境連盟(エコリーグ)という団体で活動していました。学部にいる時から関わっていて、修士 1 年のときには代表理事を務めました。もともと 1、2 年次は学内で環境問題の解決に取り組んでいる環境三四郎というサークルに所属していましたが、3 年次以降はエコリーグの活動にシフトしていき、徐々に活動範囲を広げながら、相当時間を費やしていました。「早く何かをやりたい」、「学生だけど何とか貢献したい」と思いで積極的に課外活動に参加していました。その想いは強くて、実はもっと遡ると中学校の頃から積極的に活動していました。当時、中学校に特別委員会を設立して資源回収として空き缶の回収や、NASA が撮影したポスターを自分たちの教室に貼ってみんなの意識を持とうという国連の“ Our planet in every classroom ”というプロジェクトに参加したりしました。今思えばやや無謀だったのですが、直接国連の窓口に電話してスペイン語でやり取りを始め、それが上手く通じないと習いたてのひどい英語に切り替えたりして、どうにか意思を伝えました。後日、国連からポスターが送られてきたときは嬉しかったですね。そのような経験もあり、大学時代に積極的に課外活動をしていたのは、どちらかというと早く発信したい、早く貢献したいと思っていたからですね。

⑤学生時代の経験が今の仕事にどう活かされていますか

どのような経験が将来の仕事に役立つか、ではなく、自分の過去の経験をいかに活用するか、というのが僕は大事だと思います。だから、これをやっておいた方がいいというものは存在しません。たまたま、新入社員に対して「君が大学でやったことはすべて忘れていい。今から自分が一から教える。」と言う人がいま

すが、そんなに私達は長生きではないのに 4 年間も無駄だと切り捨てるなんでもったいないですよ。今まで生きてきたところで得られた経験というのを自分の目の前の仕事に常に最大限活用していく、全部をそこに投入していく、ということが大事且つ良い仕事をするために必要だと思います。

例えば、僕は高校生の頃に習った知識なども全て仕事の中に投入しています。意外なことでも色々なところで役立つものです。僕は生物学が好きで、自分なりに勉強したことがあるのですが、およそ外交官として生物や環境の知識などを活用するというのは想定されません。けれど、侍従を務めていたときには、陛下は魚類学者で研究者で植物の話がお好きなので、両陛下とお話をする際にはその生物学の知識がすごく役立ちました。

また、今は TPP の担当になっていますが、TPP でやはり日本にとって一番問題となってくるのは農林水産品である米・小麦・牛肉・豚肉・乳製品などです。「ホエイ」を知っていますか？ヨーグルトを買うと上に少し液体の部分がありますが、それがホエイです。物によっては蓋を見ると、「表面の液体は乳清(ホエイ)とって～品質に問題はありませぬ」と書いてあることがあります。このホエイが実は貿易上交渉上極めて重要な要素になることがあるのです。けれど、普通の人はホエイと言ってもわからないですよ？このようなまさに家庭科で習ったようなことが、目の前の仕事にすごく役立っています。

⑥ 今のお仕事で、楽しいこと・やりがい・辛いことは何ですか

学生の頃僕は極めて政府に批判的だったので、国家公務員になる気は全くありませんでした。環境破壊などを見逃してきたのは政府の責任だと思っていたんです。けれども、ひょんなことから国家公務員になりました。国家公務員というのは組織として動いているので、組織が決めたことをやらなければなりません。国家という機関として仕事を遂行しなければならないので、自分の好き嫌いでは仕事をしてはいけません。そういう意味では、組織の決定や方針が自分の良心が信じるところと必ずしも一致しないことがあります。それでもしっかりと遂行しなければならないところに仕事の難しさはありますね。また、国家公務員全般に言えることですが、我々は国民の利益を追求して行きたいとは思っているけれども、何が国益なのかを認識することは結構難しい。僕がこれまで従事した TPP などの経済交渉や安保に共通していますが、声の大きい人がサイレント・マジョリティよりも目立ったり、受け入れられやすかったりすることがよくあるのではないかと思います。積極的にアイデアや意見を持っているけれども、大きな声で言わない人達も結構いると思うんですよ。だから、国民の声に耳を傾けるというときのその「声」というのはすごく認知しにくいんです。大きい声を聞けば良いのかということと必ずしもそうではないだろうし、サイレントな部分に頑張る耳を傾けるのも難しい。一見すると、世論の賛否が拮抗しているかのように見えても、実際には圧倒的多数のサイレント・マジョリティと極めて少数だけ高声集団ということもあつたりするわけです。一方で、外務省という組織はすごく層が厚くて、優秀な人達が沢山いることは、面白いことの一つです。日々「この人すごい」「自分ももっと学ばないとダメだな」と思える人が周りにいるので、それはすごくありがたいことですね。向上心というよりも、「これはやばい、ちゃんと勉強して自分を鍛えないとダメだ」と自分に刺激を与えてくれる優秀な人が周りにいます。

⑦ どのような想いを持ってお仕事に取り組まれていますか

僕は日本の国家公務員なので、日本の利益と他の国の利益が抵触した場合には日本の利益を通すために仕事をしなければなりません。けれど、そもそも外交官に最も求められていることというのは、win-win となる解を生み出していくことだと思っています。そのようにもっていくことによって、世界を良くしていきたいと考えています。僕が外交上よく思うのは、日本の利益になることや日本の欲するところが、すなわち世界の利益になって欲しいということです。そのような日本にしていきたいとも思いますし、そのような世界になって欲しいと思います。

一つ例を挙げると、日本車のハイブリッドカーがあると思います。本来環境問題の対策としてはもっと車が少なくなったほうが良いけれども、現状そうはなりません。ですから、せめて全ての車がハイブリッドカーになったら少しは環境面も良くなるのではないのでしょうか。またこうした車が世界で売れることは、日本にとって利益になります。また、それは世界にとっても利益になると僕は思います。燃費の悪い車が走るより絶対に良いです。そういうことであるならば、日本が有利になるような環境基準を国際的につくることを提言し、外交の場で積極的に推していきたいです。1960 年代、アメリカのカリフォルニア州で排気ガスに関するマスキー法が施行されたのですが、当時世界で一番厳しい排ガス規制と言われたその基準を最初に乗り越え

たのは日本の大手自動車メーカー2社でした。基準が作られるとそれに該当しない他の車が追いやられ、技術革新によって基準を乗り越えられるところがその後有利になってシェアを拡大します。世界をよくするものであるならば、こういったことは良いのではないかと思います。

僕は世界に繋がるところまでを見たいと思って仕事をしています。自分がやろうとしていることの先に世界を見ていきたい、見えるようにしたいなと思います。

⑧外務省職員に求められる知識や能力は何だと思いますか



色々なキャラクターや、やり方があると思いますが、ベーシックな能力としては適応力だと思います。海外で仕事をするとき、その国にちゃんと溶け込んで、その国の言葉を喋りその国の物を食べて、その国の人たちと理解しあえるようにならなきゃいけないと思います。それから、信頼を得る力も必要だと思います。外交というものは国と国の約束ですが、国家というのは概念でしかなくて、口もなければ手もなければ握手もできない。最終的には一人の人間に投影されるんです。例えば、僕が相手の国の外交官と「じゃあそれで」と握手をする、これが二国間の国際約束となるのです。我々は合意することをよく「握る」という言い方をしますが、それをするためには

相手が信頼出来る人かを見極めなくてはならないし、相手にも信頼されないと最後の約束はできません。

また英語に加えて、もう一つ外国語を習得することも大きな武器となりますね。前述のように僕は入省後、フランス留学をしたお陰でどうにかこうにか日本語、英語、スペイン語、フランス語の4か国語を喋れます。結論から言うと、僕はフランス語を勉強したことは良かったなと思っています。確かに「英語で留学して博士課程」という選択肢は惜しかったなと思うところがありますが、特に外交官として言語は大事で、英語はみんなやっているんですよね。だから英語で勝負するからにはネイティブ並みに話せなければいけないけれど、それは帰国子女などには後から勉強してもなかなか敵わない。一方で、もう1つ武器を持つことはすごく大事で、フランス語が話せるということはみんなと勝負できる剣をもう1つ持てるということで武器が増えるので、外交官として比較の有利です。フランス語はかつて外交の基礎言語であったので、いまだに様々な用語が残っており、ヨーロッパの外交官の多くはフランス語を勉強しています。フランス語をやっている人は少数派になってきつつあるけれど、その連帯感は強いという印象を受けましたね。

⑨これからのご自身の夢を教えてください

今はやはり海外の現地に行って、外交の最前線で仕事をしたいと強く思っています。さっき僕は現場では何もわからないと言ったのですが、それでもやはり現場に一番行きたいですね。そこはちょっと矛盾しているかもしれないと自分でも思いますが、僕は葛藤だとか矛盾というものは常に存在するものだと思います。それがあからこそ、人間は更に向上したいとより考えるようになるのだと思います。今は、直接人を助けるとか、木を植えるといった現場からはだいぶ離れたところに来てしまっているのですが、それでも常に現場を助けたいという思いは変わりません。また国際的な議論をしていく上でも、さらに専門性を高めて、アカデミックな議論ができる人になりたいと常に思っています。

⑩「国際協力」とは何ですか。お考えを教えてください

すごく難しい質問ですが、この時代に生きた人にとって国際協力は当然のことなんじゃないかと僕は思います。今や世界は一体となって、あらゆるものが国際的な繋がりを持っている。日本に住む我々だって、昼飯ひとつにしても海外からのもので生きていますよね。だから僕は、この時代の日本に生まれた人にとっては常識であって、当然のことなんじゃないかなと思っています。そもそも国際協力なしでやるってどうしたことなんだ、くらいに思っています。平和で豊かな世界があつてこそ、平和で豊かな日本があると思うので。日本だけが平和で豊かであり続けることってないと思うんですよね。実際に、世界でまだ戦争が行われて

いる中で、日本は戦後 50 年間紛争に巻き込まれることもなく、自分から仕掛けることもありませんでした。生活水準も高いですね。そうすると、この豊かな生活を維持・継続して、更には他の国々にもそうなるために、国際協力というのはやはり当然の務めだろうなという気がするんですよ。

①国際協力に興味を持っている学生へメッセージをお願いします

僕が一番伝えたいメッセージは、「学生の時に学生にしかできないことをやってください」ということです。具体的に言うなら、海外旅行と語学の勉強だと思っています。今皆さんは大学生ですよ。多くの方は高校生の時にできなかったことをここでやろうと思います。でも、僕が定義する大学生活は、高校生と社会人の間にある貴重でわずかな時間です。それはすなわち、高校生の時にできることは高校でやっておき、社会人の時にできることは全て社会人になってからやればいいということ。だから僕はインターンシップを全く勧めないんですよ。仕事の真似事は仕事をやればいい話であって、それよりも今しかできないことに全力を尽くしてほしいです。本当に高校生と社会人を繋ぐわずかで貴重な時間です。就活やバイトが忙しい、なんていつている暇はないですよ(笑)。僕も学生最初の冬休みに一人でバックパッカーとしてヨーロッパを廻って以来、あちこちに行きました。仕事を始めてからも、休暇が取れることがわかれば翌日に出発してアンコールワットに行ったりしましたね。まさに今の時間を最大化して、自分の目で、耳で、口で世界を見てきてほしいし、体感してほしいと思います。



※注 1:

UNEP (United Nations Environmental Programme) : 国連環境計画。国際環境協力分野における調整、活動の推進を行なう国際機関。

UNDP (United Nations Development Programme) : 国連開発計画。貧困削減を目標とした途上国支援のリーダーシップを担う国際機関。

2014 年 11 月 8 日(土) 本郷キャンパス御殿下記念館にてインタビュー
修了生：木戸大介ロベルトさん（外務省勤務）
聞き手：宍戸亜矢子（修士 2 年）、多田玉青（修士 2 年）、中村信之（修士 1 年）
編集：宍戸亜矢子、多田玉青、中村信之、篠田景子（修士 1 年）